

判決

DAS URTEIL

フランツ・カフカ Franz Kafka

青空文庫

すばらしく美しい春の、ある日曜日の午前のことだった。若い商人のゲオルク・ベンデマンは二階にある彼の私室に坐っていた。その家は、ほとんど高さと壁の色とだけしかちがわず、川に沿って長い列をつくって立ち並んでいる、屋根の低い、簡単なつくりの家々のうちの一軒である。彼はちようど、外国にいる幼な友達に宛てた手紙を書き終えたばかりで、遊び半分のようにゆつくりと封筒の封をし、それから机に肘^{ひじ}をついたまま、窓越しに川をながめ、橋と、浅緑に色づいている対岸の小高い丘とをながめた。

この友達というのが、故郷での暮しに満足できず、すでに何年か前にロシアへ本格的に逃げ去っていったことを、彼は考えていた。今、その友人はペテルスブルクで商売をやっているが、最初はとても有望のようであったその商売も、ずっと前からすでにゆきづまっている様子で、こちらへ帰ってくることもだんだんとまれになってきているが、いつでもそれをこぼしていた。異国の空の下でむだにあくせく働いたわけで、顎^{ほお}や頬^{ほお}いちめんの異様な髯^{ひげ}が、子供のころから見慣れた顔をなんともぶざまにおおっていた。黄色な顔の皮膚の色は進行しつつある病気を暗示しているようであった。彼の語るところによれば、かの地における同郷仲間ともしつくりいかないで、かといつてロシア人の家庭ともほとんどつ

き合いをしているわけでもなく、覚悟をきめた独身生活を固めているということだった。

どうやら道に迷ってしまつたらしいこんな男、気の毒とは思うが助けてやることのできないこんな男に、なにを書いてやろうというのか。また故郷へ帰り、生活をこちらへ移し、昔の友人関係とよりをもとして——そのためには実際、障害は全然ないのだ——、さらには友人たちの助力を信頼するように、などと忠告すべきだろうか。だが、そんなことは同時に、いたわつて書けば書くほどむこうの心を傷つける結果となり、君のこれまでのすべての試みは失敗したのだ、もうそんなものから手を引くべきだ、帰つてきて、もう去ることのない帰郷者としてすべての人びとに驚きの眼を見はらせて甘んじていなければならぬのだ、友人たちだけはいくらか理解してくれよう、君は年とつた子供なのだ、こちらにとどまつて成功している友人たちに黙つてついていかなければならぬのだ、といつてやるのに等しい。ところで彼に加えられるにちがいないそうしたいっさいの苦しみは、はたしてほんとうになんかの役に立つものだろうか。たぶん、彼を帰郷させるなどということ、かつしてできない相談なのだ。——おれにはもう故郷の事情はさっぱりわからない、と彼自身がいったではないか。——それで彼はどうあろうと異郷にとどまることだろう、友人たちの忠告に不愉快な思いをし、友人たちといつそう疎遠になつて。ところで、もし

ほんとうに忠告に従って帰郷し、郷里で——もちろんこれはわざとそうするわけではないが、さまざまな事実によつて——抑圧され、友人たちのなかにあつても、また友人たちがいなくてもしつくりした気持にはなれず、恥辱の思いに悩み、今度はほんとうに故郷も友人もいないということにでもなれば、今のまま異郷にとどまるほうが彼のためにずっとよいのではなからうか。こうした事情の下では、彼が故郷でほんとうに身を立てるなどと、いったい考えることができるであらうか。

こうした理由から、たとい手紙のつながりをなおもきちんとつづけようと思つても、どんなに離れている知人たちにもはばかることなく書き送るようなほんとうの意味の通信をすることはできなかつた。その友人はすでにこれで三年以上も故郷へきたことはなく、帰らないのはロシアの政治情勢の不安定のためにもどうしてもやむをえぬことだ、と説明していた。そこで政情不安は、十万にも及ぶロシア人が平気で世界を歩き廻っているのに、つまらない一商人のほんのしばらくの外国旅行さえも許さないということであつた。ところでこの三年のあいだには、まさにゲオルクにとつて多くの変化が起つていた。およそ二年前にゲオルクの母の死去ということがある、それ以来ゲオルクは父と共同生活をしてきたが、そのことは友人もたしかに聞かされて、一通の手紙にそつけない表現でくやみを述

べてきたが、そんな調子で書いた理由はおそらく、こんなできごとの悲しみは異郷にあつてはまったく想像しがたいものだ、というところにあつたのであろう。ところでゲオルクは、そのとき以来、ほかのすべてのことと同じように、自分の商売にもかなりな決意をもつて立ち向つていた。おそらく母の生前は、父が商売において自分の考えを通そうとして、ゲオルクのほんとうの独自の活動を妨げていたのであつた。おそらく父は母の死後、相変らず商売で働いてはいたものの、前よりはひかえ目になり、またおそらくは——きわめてありうべきことであつたが——さまざまな幸運な偶然がもつと重大な役割を演じたのだつた。ともかく商売は、この二年間のあいだに、まったく思いもかけぬくらいに発展していった。社員の数は二倍にしないでいられたし、売上げは五倍にもなり、今後いつそうの発展も疑いなく予想できるのだつた。

ところが例の友人は、こうした変化を全然知らなかつた。前に、おそらくいちばん近くは例のくやみ状においてであつたが、ゲオルクにロシアへ移住するように説き伏せようとし、ほかならぬゲオルクの商店の支店がペテルスブルクにあるとしたときの見通しをこまごまと述べてきた。彼の述べている数字は、ゲオルクの商売がそのころ占めていた規模に比べると、まったく影の薄いようなわずかのものだった。しかしゲオルクは、自分の商売

の成果について友人に書いてやる気にはなれなかった。そんなことを書けば、あとになつた今では、ほんとうに奇妙なふうに見えたことであろう。

そこでゲオルクは、友人にはいつもただ意味のないきごとだけを書いてやるにとどめていた。静かな日曜日に思いめぐらすと、記憶のうちにとりとめなく積み重なっていくようなできごとだけを書いてやったのだつた。彼はただ、友人が長い間隔を置いて故郷の町についてきつと思ひ描いているにちがいないような、そしてそれで満足しているにちがいないような想像を乱さないでおこうと努めた。それでゲオルクがやったことといえ、一人のなんでもない男と一人の同じようになんでもない娘との婚約を、友人にかなり間を置いた手紙で三度知らせてやったことであるが、つまらない話といつてもやがて友人は、ゲオルクの意図にはまったく反して、この出来ごとに興味を抱き始めたのだつた。

だがゲオルクは、自分が一カ月前にフリーダ・ブランデンフェルトという金持の家庭の娘と婚約したということを書き明けるよりも、以上のようなつまらない話を書くほうがずっとよかつた。彼は婚約者としばしばこの友人のことを話し、また自分とこの友人とのあいだに交わされている特別な文通関係についても話した。

「それじゃあ、そのかたは私たちの結婚式にとても来ては下さらないわね」と、彼女は

った。「でも私は、あなたのお友だちのだれともお知合いになる権利はあるんだけれど」

「ぼくはあの男の迷惑になりたくないんだ」と、ゲオルクは答えた。「ぼくのいうことをよくわかつてくれたまえ。あの男は、いつてやればきつとくるさ。少なくともぼくはそう信じている。でも、もしそんなことをいつてやれば、あれは無理じいされ、傷つけられた感じがするだろう。おそらくぼくのことをうらやましいと思ひ、きつと不満を感じ、しかもその不満をけつして消し去ることもできないままに、ひとりぼっちでロシアへ帰っていくことになるだろう。ひとりぼっち——それがどんなことか、君にはわかるかい？」

「ええ、わかるわ。それなら、ほかの方法で私たちの結婚のことを知ってもらえないかしら？」

「そういうやりかたがいけないとは、ぼくもいわないよ。でも、あの男の生きかたからいうと、とてもできそうにもないな」

「ゲオルク、あなたにそんなお友だちがいらつしやるなら、あなたは婚約なんかさならなければよかつたんだわ」

「そうだ。婚約したのはぼくたち二人の責任だ。でも、今となつては、もう婚約を解消する気はないな」そして、彼の接吻を浴びながら、女が息をはずませて、

「でもほんとうからいうと私、その人のことが気になってしかたがないわ」といったとき、友人にいつさいを知らせてやることはそれほどあぶなかしいことでもない、とほんとうに考えた。

「彼はありのままのぼくをそのまま受け入れてくれないといけないのだ。今のぼくよりもおそらくは彼との友情にふさわしいかもしれない人間を、ぼくは自分のなかから切り捨てることはできない」と、自分にいつて聞かせた。

そして事実、彼はこの日曜日の午前に書いた長い手紙のなかで、成立した婚約のことをつぎのような言葉で知らせてやることにした。

「最大のニュースのことをぼくは最後まで取っておいた。ぼくはフリーダ・ブランデンフェルトという娘と婚約した。この人は金持の家庭の娘だ。その家庭は、君がここから去ってからずっとあとになって当地に住むことになったのだ。だから、君はこの家のことはほとんど知っていないはずだ。ぼくの婚約者についてもとくわしいことを知らせる機会はあるだろう。きょうのところは、ぼくがほんとうに幸福であり、ぼくたち同士の間柄では、君がぼくのうちに今ではごくありふれた友人を持つばかりでなく、幸福な友人を持つことになるというだけのちがいがいしかないのだ、ということに満足してくれたまえ。さらに君は、

ぼくの婚約者のうちに、一人の誠実な女友だちを持つことになるのだ。それは君のような独身者にとつては、けつして無意味なことではない。彼女は君に心からよろしくといっているし、近く君に手紙を書くだろう。君がぼくたちを訪ねてくれることにいろいろ妨げがあることは、ぼくも知っている。しかし、ぼくの結婚式は、あらゆる障害を一気に打ち破る絶好のチャンスではないだろうか。だが、それはどうあろうとも、どんな顧慮もなく、ただ君の本心に従つて行動してくれたまえ」

この手紙を手にして、ゲオルクは顔を窓に向けたまま、長いあいだ机に坐っていた。通りすがりに横町から会えしやく釈した一人の知人に対しても彼は放心したような微笑でやつと答えただけだった。

やがて彼はその手紙をポケットに入れ、部屋を出ると、小さな廊下を通つて父の部屋へいった。もう何カ月かのあいだ、彼はその部屋へいったことがなかった。また、その必要も全然なかったのだ。というのは、彼は父とはいつでも店で出会つていたのだ。二人はある食堂で昼食を同時にとるのだ。晩は、二人とも好きなような行動をするのではあつたが、そのあとではなおしばらく共同の居間に坐つて、めいめいが新聞を読んで過ごした。もつとも、ゲオルクが友人たちといつしよにしていることや、このごろでは婚約者が彼

を訪ねることが、いちばん多いのではあった。

こんな晴れわたった午前でさえ、父の部屋がまっ暗であることに、ゲオルクは驚いた。狭い中庭の向うにそびえている壁は、それほどの影を投げていた。父は、亡くなった母のさまざまな思い出の品に飾られている部屋の片隅の窓辺に坐り、いくらか衰えてしまった視力の弱さを補おうとして、新聞を目の前に斜めに構えて、読んでいた。机の上には朝食の残りがのついていたが、その朝食はたいして手がつけられていないように見えた。

「ああ、ゲオルクか！」と、父はいつて、すぐ彼のほうに歩み寄ってきた。重たげな寝衣が、歩くときにはだけて、すそがひらひらした。——「おやじは相変わらず大男だな」と、ゲオルクは思った。

「ここはまったくかなわないほど暗いですね」と、彼はいった。

「そうだ、もう暗くなった」と、父は答えた。

「窓も閉めてしまつたんですね？」

「わしはそのほうがいいんだ」

「そとはほんとうに暖かですよ」と、ゲオルクは前の言葉につけたすようにいつて、椅子に坐つた。

父は朝食の食器を片づけ、それを箱の上にのせた。

「じつはお父さんにお話があるんです」と、老父の動きをぼんやりと目で追いながらゲオルクは言葉をつづけた。「やはりペテルスブルクへぼくの婚約のことを知らせてやることにしました」彼は手紙をポケットから少し引き出したが、またポケットへ落した。

「ペテルスブルクへだつて？」と、父がきいた。

「ぼくの友人へです」と、ゲオルクは言い、父の目をうかがった。——「おやじは店ではこんなじゃないんだが。ここではどつしり坐つて両腕を胸の上で組んだりしている」と、ゲオルクは思った。

「ふん、お前の友人へね」と、父は言葉に力をこめていった。

「お父さんもご存じのように、ぼくは婚約のことをはじめは黙つていようと思ったのです。心づかいからで、そのほかの理由なんかありません。ご存じでしょう、あの男は気むずかしい人間ですから。あの男の孤独な生きかたからいつてほとんどありそうもないことではありませんが、ほかのところからぼくの婚約のことを知るかもしれない、とぼくは考えました。——それはぼくにはどうにもなりませんもの。——でも、ぼく自身からはあの男にけつして知らせまい、と思つたのです」

「それで、今はまた考えを変えたというのか」と、父はきき、大きな新聞を窓べりに置き、その上に眼鏡を置くと、片手でそれをおおった。

「そうです。今はまた考えが変わったのです。あの男がぼくの親友なら、ぼくの幸福な婚約はあの男にとつても幸福であるはずだ、とぼくは思いました。それでぼくは、知らせてやることをもうためらわなくなりました。でも、その手紙をポストへ入れる前に、お父さんにいつておこうと思つたのです」

「ゲオルク」と、父はいつて、歯のない口を平たくした。「いいか。お前はこのことでわしに相談するために、わしのところへきた。それはたしかにいいことだ。だが、今わしにほんとうのことを洗いざらい言わないなら、なんにもなりやしない。なんにもならぬというよりもつとといけないことだ。わしは今の問題に関係ないことをむし返すつもりはない。だが、お母さんが死んでから、いろいろといやなことが起つた。おそらくそういうことが起る時がきたのかもしれないし、わしらが考えているのよりも早くその時がきているのかもしれない。商売でもいろいろなことがわしにはわからないままになつてゐる。おそらくわしに隠してあるのではあるまい。——わしに隠してあるなんて、わしは全然思いたくないからな。——わしはもう元気がなくなつたんだらう。記憶力も衰えたからな。わしは

もうたくさんのことを全部見ている力がない。一つには年という自然の結果だし、もう一つにはお母さんの死んだことがお前よりもわしに強い打撃を与えたからだ。——それはともかく、今の問題、つまりその手紙のことだが、ゲオルク、わしをだまさないでくれ。ほんのちよつとしたことだし、息をつくほどのことでもないじゃないか。だから、わしをだまさないでくれ。いつたい、そのペテルスブルクの友だちというのは、ほんとうにいるのかね？」

ゲオルクは当惑して立ち上がった。

「ぼくの友人たちのことなんか、ほっておきましょうよ。千人の友人だって、お父さんにはかえられません。ぼくの信じていることが、お父さんにはわかりますか？ お父さんは自分の身体をいたわらなすぎます。でも、年をとれば、身体をいたわる権利があるというものです。お父さんはぼくの商売に欠かすことのできない人です。それはお父さんだつてよくご存じのはずですね。でも、もし商売がお父さんの健康をそこねるといふのなら、商売なんかあしたにでも永久にやめますよ。そんなことはいけません。それなら、お父さんのために別な生きかたを始めましょう。でも、根本からちがつた生きかたをするのです。お父さんはこんな暗いところに坐つていらつしやる。ところが居間にいらつしやれば、明

るい光を浴びることができるとは、きちんと食事をあがって身体に力をつけるかわりに、朝食もちよっぴりあがるだけです。窓を閉めきっていらっしやるけれど、その空気が身体にいいにきまつているじゃありませんか。いけません、お父さん！ お医者をつれてきて、その指図に従おうじゃありませんか。部屋も取り変えましょう。お父さんが表の部屋へいき、ぼくがこっちへきます。お父さんには少しも模様変えなんかありません。みんなむこうへ持つていきます。でも、そうしたことをみんなやるまでにはまだ間があります。今は少しベッドに寝て下さい。お父さんには絶対に休息が必要です。さあ、着物を脱ぐのを手伝いましょう。いいですか、ぼくにもそんなことはできません。それともすぐ表の部屋へいきますか。それならしばらくぼくのベッドに寝て下さい。ともかくそれがりこうなやりかたというものでしょう」

ゲオルクは父のすぐそばに立った。父はもつれた白髪のを深くうなだれていた。「ゲオルク」と、父は低い声で、感動もなくいった。

ゲオルクはすぐ父と並んでひざまずいた。彼は、父の疲れた顔のなかで、瞳孔どっこうが大きくなり、みひらかれ目尻から自分に向けられているのを見た。

「お前にはペテルスブルクの友だちなんかいないんだ。お前はいつもふざけてばかりいた

が、わしに対しても悪ふざけをひかえたことがなかった。お前がペテルスブルクなんかには友だちをもっているわけがあるものか！ そんなことは全然信じられないぞ」

「もう一度よく考えて下さい、お父さん」と、ゲオルクはいつて、父を椅子から起こし、父がまったく力なく立ち上がったとき、寝衣を脱がせた。

「これでまもなく三年になりますが、ぼくの友人はうちを訪ねてきたのですよ。お父さんがあの男をあまり好いていなかったことは、まだおぼえています。少なくとも二度、ぼくはあの男のきていることをお父さんに隠しました。じつはあの男がぼくの部屋にいたのですが。ぼくにはお父さんがあの男を嫌う気持ちがよくわかりました。あの男にはいろいろな妙なところがありますからね。でも、やがてお父さんは彼とまったくうちとけて話し合っていました。お父さんがあの男のいうことに耳を傾け、うなずいたり、質問したりしていることを、ぼくはとても誇りにしたのでした。よく考えてみれば、思い出すはずですよ。あの男は、そのときロシア革命の途方もない話をしました。たとえば、キエフへ商用旅行でいったとき、騒動のさなかに一人の神父がバルコンに立っているのを見たということ。その神父は、てのひらを切つて大きな血の十字架を書き、その手を上げて、群集に呼びかけていた、というじやありませんか。お父さん自身が、この話をあちこちでくり返し聞かせ

ていましたよ」

こうしているうちに、ゲオルクはうまく父をまた椅子に坐らせ、リンネルのパンツの上にはいているトリコットのズボン下も、靴下も、注意深く脱がせた。あまりきれいではない下着をながめて、彼は父のことをかまわないでおいた自分をとがめた。たしかに、父の下着の着換えに気をくばることも、彼の義務であつたらう。父の将来をどうしようとするのか、彼は婚約者とまだはつきり話し合つたことはなかつた。しかし、彼らは暗黙のうちに、父はもとの住居すまいにひとり残るものときめていたのだつた。だが今は、父を自分の未来の家庭へ引き取ろうと、はつきりと急に決心した。よく考えてみれば、新しい家庭に父を引き取り世話するという考えは、あまりに遅く思い浮かんだようにさえ思われるのだつた。

両腕で父を抱えてベッドへ運んだ。ベッドへ二、三步向かいながら、父が胸の上の時計の鎖をもてあそんでいるのをみとめたとき、恐ろしい感じが襲つてきた。彼は父をすぐベッドへ寝かすことができなかつた。それほどしつかりと父はこの時計の鎖をつかんでいるのだつた。

しかし、父がベッドに寝るやいなや、万事うまく片づいたように思われた。父は自分でふとんにくるまり、かけぶとんだけをさらに肩のずつと上までかけた。父はそれほど無愛

想そうにでもなく、彼を仰ぎ見た。

「ねえ、もうあの友人のことを思い出したでしょう？」と、ゲオルクはきき、父に向つて元氣づけるようにうなずいて見せた。

「よくふとんがかかっているかね？」と、父はきいた。両脚に十分かかっているかどうか、自分では見ることができないようであつた。

「ベッドに入ったら、もうよい気分でしょう？」と、ゲオルクは言い、父にかかっているふとんをなおしてやつた。

「うまくかかっているかね？」父はもう一度きいて、返事に特別氣をつかっているようであつた。

「静かになさい、うまくかかっていますよ」

「うそだ！」と、自分の問いに対する返事が終わるか終わらないうちに、父は叫び、力いっぱいふとんをはねのけたので、ふとんは一瞬飛びながらぱつと拡がった。父はベッドの上にまっすぐに立つた。ただ片手だけは軽く天井にあてていた。「お前はわしにふとんをかけようとした。いいか、そんなことはわしにはわかつているんだぞ。だが、わしはまだふとんなんかかけてもらっていないぞ。これがわしのぎりぎりの力だとしても、お前なん

か相手には十分だ。お前には十分すぎるくらいだ。お前の友だちのことはよく知っている。あの男はわしの心になつた息子といえるくらいだ。だからお前はあの男も長年だましてきたのだ。そのほかにどんな理由がある？ わしが彼のために泣いたことはないでも、お前は思うのか？ だからお前は自分の事務室に閉じこもったりするのだ。だれも入つてはいけない、社長は仕事で、というわけだ。——それもただ、お前がロシア宛ての偽手紙を書くことができるためなのだ。だが、ありがたいことに、だれも息子の量見を見抜きなさいなどは父親に向つて言いはしない。今ではお前は、わしを押しつけたと思つて完全に押しつけたので、父親を尻の下にしくことができるし、父親は動けない、と思つてゐる。それでお前さんは結婚する決心をしたのだ！」

ゲオルクは父の恐ろしい姿を見上げた。父が突然よく知つてゐるといつたペテルスブルクの友人のことが、今までにないほど彼の心を打つた。彼はその友人が広いロシアで痛手を受けてゐる様子を思い浮かべた。掠奪りやくだつされた空っぽの店の戸口に立つてゐるのを見た。商品棚の残骸のあいだ、めちやめちやにされた品物のあいだ、垂れ下がったガス燈の腕木のあいだに、友人はまだたたずんでいる。なんだってそんなに遠くまで去つていかなければならなかつたのだろうか！

「わしをよく見ろ！」と、父は叫んだ。ゲオルクは、ほとんど呆然ぼうぜんとしたまま、あらゆるものをつかむためベッドへ走っていかうとした。だが、途中で足がとまってしまった。

「あのいやらしい娘がスカートを上げたからだ」と父は、ひゅうひゅう音がもれる声でしゃべり始めた。「あいつがスカートをこうやって上げたからだ」そして、その様子をやって見せようとして、下着をたくし上げたので、父の太股には戦争のときに受けた傷あとが見えた。

「あいつがスカートをこうやって、こうやって上げたからだ。それでお前はあいつに引きよせられてしまったのだ。あの女と水入らずで楽しむために、お前はお母さんの思い出を傷つけ、友だちを裏切り、父親を身動きできぬようにベッドへ押しこんだのだ。だが、わしが動けるか、動けないか、さあ、どうだ」

父は完全に自由に立ち、脚をばたばたさせた。自分の目が高いことを誇って、顔を輝かせていた。

ゲオルクは、父からできるだけ離れて、部屋の片隅に立っていた。ずっと前に、廻り道などして背後や上から襲われるようなことがないように、すべてを完全にはつきり見きわめようと固く決心していたのだった。今やふたたび、ずっと前から忘れていたその決心を

思い出したが、短い糸を針穴に通すようにまた忘れてしまった。

「だが、お前の友だちはお前に裏切られたわけではないぞ！」と、父は叫び、人差し指を左右に動かしてそれを強調した。「わしはこの町での彼の代理人だったのだ」

「喜劇役者！」と、ゲオルクは叫ばないではいられなかったが、すぐにその損なことをさとして、もう遅すぎたが——両眼をじつとすえたまま——舌をかんだ。それで彼は痛みのために身体が曲がるほどだった。

「そうだ、もちろんわしは喜劇を演じたのさ！ 喜劇！ いい言葉だ！ ほかにどんな慰めが、わしという年老いた男やもめの父親にあるだろうか？ 言ってくれ——お前が答える瞬間だけはお前はまだわしの生きている息子というわけだ——、奥の部屋に閉じこめられ、不実な使用人どもに追い払われ、骨まで老いぼれたこのおれに、何が残されているというのだ？ 息子のほうは歓声を上げながら世のなかを渡り、わしがこれまでに仕上げた店をやめてしまい、面白がつて笑いこけ、紳士ぶった無口な顔つきをして父親から逃げ去ってしまうというのだ！ わしがお前を愛さなかったと思うのか、お前の実の父親であるこのわしが」

「今度はおやじは身体を前にかがめてしまうだろう」と、ゲオルクは思った。「もしおや

じが倒れ、くだけてしまったら！」この言葉が彼の頭のなかをかすめ過ぎた。

父は身体を前にかがめたが、倒れはしなかった。ゲオルクは父が期待したように近づかなかったのも、父はまた身体を起こした。

「そのままそこにいるがいい。わしはお前なんかいらさないさ！ お前にはまだここまですべてくる力があると、お前は思っているんだ。それだのにお前はよつてもこない。そうしたいと思うからだ。思いちがいないでくれよ！ わしはまだまだお前よりずっと強いんだぞ。だが、おそらくおれのほうがお前に譲歩すべきだったのかもしれない。ところがお母さんが自分の力をわしに与えてくれたのだ。お前の友だちとおれは心から結ばれているし、お前の顧客の名前はとく、いこのポケットのなかに入っているんだぞ！」

「シャツにさえポケットをつけている」と、ゲオルクは自分に言い聞かせた。それを言いふらしたら、おやじを世間に顔向けできぬようにしてやることができるんだ、と彼は思った。そう思ったのも、ほんの一瞬だった。というのは、彼はあとからあとからなんでも忘れてしまうのだった。

「お前の婚約者にしがみついている方がいい。さあ、わしに立ち向ってみろ！ わしはあの女をお前のそばから払いのけてやるぞ。どうやって払いのけるのか、お前にはわかるまい

！」

ゲオルクは、そんなことは信じないというように、しかめ面をした。父は自分のいうことがほんとうだと誓うように、ゲオルクがいる部屋の隅のほうにうなずいてみせた。

「きょうも、お前がやってきて、お前の友だちに婚約のことを書いてやったものだろうか」と聞いたとき、わしは愉快だったよ。あの男はなんでも知っているんだ、ばかめ、なんでも知っているんだぞ！ お前がわしから筆記具を取り上げることが忘れたものだから、わしがあの男に手紙を書いてやったんだ。だからお前の友だちは何年も前からこっちへこないのだ。お前自身よりあの男のほうがなんでも百倍もよく知っているんだ。お前の手紙は読まないで左手のなかでくちやくちやにしていまい、わしの手紙のほうは右手にもって読むために目の前に拵げると言うくらいだ！」

父は激したあまり腕を頭上で振った。「あの男はなんでも千倍もよく知っているんだぞ！」と、彼は叫んだ。

「万倍もでしょうよ！」と、ゲオルクは父を嘲ける^{あざ}ためにいった。しかし、まだ口のなかにあるうちにその言葉はひどく真剣な響きをおびた。

「何年も前から、お前がこの疑問をたずさえてやってくるのを、わしはじつと待ち構えて

いたのだ！ わしが何かほかのことに心をわずらわしていたとも思うのか？ わしが新聞を読んでいるとも思っているのか？ それ、見てみる！」そういって、ゲオルクに新聞を投げてよこした。父はその新聞をどうやってかベッドのなかにまでもち運んでいたのだ。古新聞で、ゲオルクが全然知らない社名のものであった。

「お前は、一人前になるまでになんて長いあいだぐずぐずしていたんだろう！ お母さんは死ぬことになって、よろこびの日を味わうことができなかつた。お前の友だちはロシアで身を滅ぼし、三年も前にすつかり零落し果ててしまった。そしてこのわしは——わしはどういう有様かは、お前にも見えるはずだ。そのために目があるはずだ！」

「お父さんはぼくのすきを狙^{ねら}っていたんですね！」と、ゲオルクは叫んだ。

同情をこめたように父はつぶやいた。

「それをお前はおそらくもつと前に言いたかつたんだらう。でも今ではもうどうにも遅いよ」

それから父は声を高めた。

「これでお前にも、お前のほかに何かあるのかわかつたらう。これまではお前は自分のことしか知らなかつたのだ！ お前はほんとうは無邪気な子どもだったが、それよりも正体

は悪魔のような人間だったのだ！——だから、わしのいうことを聞け。わしは今、お前に溺死^{できし}するように宣告する！」

ゲオルクは部屋から追い出されるように感じた。彼の背後で父がベッドの上にはたりと倒れる音が、走り去る彼の耳に聞こえつつづけていた。階段をまるで斜面をすべるようにかげ下りていったが、部屋を夜の支度のために片づけようとして階段を上がってくる女中にぶつかった。

「まあ、なんていうことを！」と、女中は叫び、エプロンで顔を隠した。しかし、彼はもう走り去っていた。門から飛び出し、線路を越えて河のほうへひきよせられていった。まるで飢えた人間が食物をしっかりとつかむように、彼は橋の欄干^{らんかん}をしっかりとぎっていた。彼はひらりと身をひるがえした。彼はすぐれた体操選手で、少年時代には両親の自慢の種になっていた。だんだん力が抜けていく手でまだ欄干をしっかりとぎって、欄干の鉄棒のあいだからバスをうかがっていた。バスは彼が落ちる物音を容易に消してくれるだろう。それから低い声でいった。

「お父さん、お母さん、ぼくはあなたがたを愛していたんですよ」そして、手を離して落ちていった。

その瞬間に、橋の上をほんとうに限りない車の列が通り過ぎていった。

青空文庫情報

底本：「世界文学大系58 カフカ」筑摩書房

1960（昭和35）年4月10日発行

入力：kompass

校正：青空文庫

2010年11月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

判決

DAS URTEIL

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 フランツ・カフカ Franz Kafka

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>